

屋外生活空間整備におけるワークショップ手法の適用性に関する一分析
ー徳島市末広公園のワークショップ事例を題材にしてー

AN ANALYSIS OF APPLICATION OF WORKSHOP METHOD TO PLANNING OUTDOOR LIFE SPACE
ENVIRONMENT -BASED ON THE SUEHIRO PARK WORKSHOP, TOKUSHIMA CITY-

澤田俊明* 森下善博** 山中英生*** 久米将夫****
Toshiaki SAWADA* Yoshihiro MORISHITA** Hideo YAMANAKA*** Masao KUME****

ABSTRACT ; In order to plan outdoor life space of good quality, residents' subjective participation is needed. Though workshop is one of the effectual methods, it has many problems. In this study, based on the Suehiro Park Workshop, the problems of workshop itself are discussed. And we discuss the problems in the case of application of workshop to the improvement of outdoor life space. Some of the results are as follows: (1) There are three ways of participation forms of specialists as group leaders in workshop; participation not expressing their career, participation giving some advice, and participation displaying their leadership. Each group leader should know which participated form they take before workshop begins. (2) In the stage of space planning, information of the space and region including "affordance" is important. Therefore, it is needed to pick up these information actively in workshop.

KEYWORDS ; outdoor life space, residents' participation, workshop, participated form, affordance

1. はじめに

1. 1 屋外生活空間の状況

屋外生活空間とは、人々が日々の生活の中でかわる屋外空間であり、公園、街路、河川などの公共空間や寺社や田畑などの空間を中心として形成される。本来、屋外生活空間が持つべき基本要素としては、多様性・連続性・社会性・生物性・自然環境性などがあげられるが、細分化の潮流の中で整備が進んだわが国の多くの屋外生活空間は、細分化がうまく多様化に結びつかず単一化され、さらに効率の追求により画一化された空間として整備されてきた。こうした屋外生活空間の多様性や社会性を確保するため、とりわけ、日常身近の屋外生活空間整備においては、利用者・生活者としての住民の主体的参加を得て整備することの重要性が増している。

1. 2 住民参加の手法

公共の屋外生活空間の整備においては、住民参加の形態は、住民サイドからみて受動的住民参加と主体的住民参加の形態に区分できる。また、住民参加の方式としては、説明会方式、協議会方式、ワークショップ（以下、WSと略記）方式などがある。従来の屋外生活空間整備は、住民参加そのものが存在しないか、存在したとしても受動的住民参加形態であり、説明会や協議会が主であった。説明会方式は、一般には事業者である行政が住民に計画を説明し、意見を聴取しながら理解と協力を求めるもので、不特定多数の住民が参加できるものの、多くの場合、行政により計画がほぼ確定した段階での説明会であり、住民の計画づくりへの主体的参加が得にくい。協議会方式は、多くの場合、行政が働きかけて行政と住民との合意形成の場とし

* 建設材料試験所 Kensetsu Zairyo Shiken-syo

** 東洋建設 Toyo Construction Company

*** 徳島大学工学部 The University of Tokushima

**** 徳島市役所 Tokushima City Office

て協議会を設けるもので、住民の出席者はあらかじめ行政により地域の役職者が選任されることが多く、一般の住民の意見が十分には反映されにくい方式といえる。このような中で、新しい住民参加の形態として、行政と住民が対等の立場で屋外生活空間を計画段階から整備していこうとする、主体的住民参加を模索する動きが生まれてきた。新しい協議会方式として住民の発案による地区レベルでのまちづくり協議会、不特定多数の住民参加によるワークショップ（以下、WSと略記）などである。

WS手法については、今から約15年前に箱根でローレンス・ハルプリンとその仲間による街づくりWS¹⁾が行われて以来、わが国においてもWSは各地に広がり多くの成果を挙げている。まちづくりや空間整備におけるWSは、早期の計画段階から行政・住民等が直接顔を合わせて、比較的長い時間をかけて合意形成を実現できる点や、WSの場そのものが参加者のコミュニケーションの場となっている点などで高い評価を得ている。WSに関する研究等としては、WSの手法とその活用を示した浅海の研究²⁾、東京世田谷区太子堂³⁾や奥沢七丁目公園における公園WS事例⁴⁾、WSの効果や意味を示した林の評論⁵⁾や、参加のデザインの実践的な資料をまとめた世田谷区の資料⁶⁾、WS技術の一覧を示した木下の研究⁷⁾、公園計画におけるWSと公園基本計画との関連を示した藤本らの研究⁸⁾、住民参加への行政の支援方法の現状を考察した葉袋らの研究⁹⁾などがある。しかしながら、WSにおける参加者意見の抽出・集約の方法やその意見の取扱いの問題、WSに参加する専門家の役割や行政の対応等、いまだ多くの課題をWS手法は抱えている。

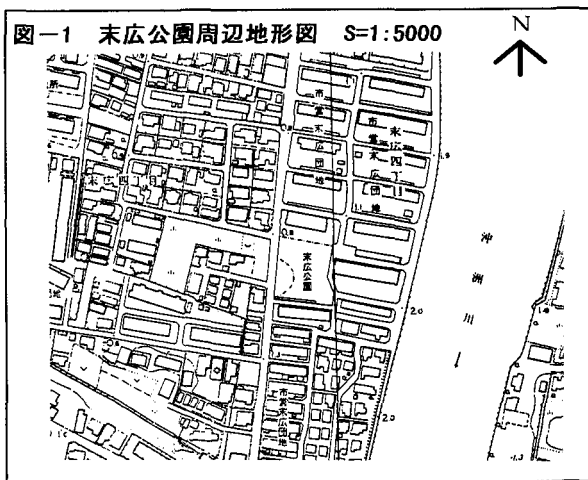
1. 3 研究の目的

本研究は、屋外生活空間整備におけるWSの実例を通じて、その特徴と問題点を明らかにし改善の方向を探るものである。具体的には徳島市末広公園WSを通じて、①WS手法自体の持つ課題や改善点の一面を明らかにし、②WS手法が屋外生活空間の整備システムとして取り入れられる場合の課題等について考察する。

WS手法自体の持つ課題や改善点については、WSにおける参加の限定性、専門家の参加、合意形成プロセスについて考察する。浅海らは、「参加のデザイン」の三要素として「プロセスのデザイン」・「プログラムデザイン」・「参加形態のデザイン」を示し¹⁰⁾、さらに、WSの場で中立的な立場から会議の進行役を努めるファシリテーターや、グループ作業時のグループリーダー、住民参加の計画やデザインの専門家の役割等について個別にふれている¹¹⁾。しかしながら、実際のWSの場では、WS運営サイドの人的制約条件などにより当日のWSの場で専門家がグループリーダーになる場面が生じ、このことがWS経験の少ないWSにおいてはWSの質を左右する大きな要因になっているものと思われる。このため、本研究では、専門家の参加を研究対象に取り上げている。

また、屋外生活空間整備システムとしてWS手法の適用性を検討するために、行政から見たWSの期待とWS手法の普及を阻害する要因、具体設計に向けてのWS情報とその伝達について検討する。

本研究にあたり著者らは末広公園WSの企画・運営に参画し、WSの内容と運営の観察、公園利用状況の観察、WS参加者へのアンケート及びヒアリングを行った。本研究では、住民の参加を得た4回のワークショップを「リアルタイム・ワークショップ（RWSと略記）」と呼ぶ。また、「行政」とは公園の管理、整備およびWS運営に責任を持つ行政主体を意味し、「専門家」とは、一般の住民以外の行政・大学関係者・建築・土木・造園・美術等のWSの企画・運営者を意味している。



2. 末広公園の概要と利用状況

2. 1 公園および周辺の状況

表－１ 末広公園概要

公園種別：街区公園	面積： 0.15ha
公園開設：昭和46年05月	誘致距離：250 m
場所：徳島市末広4丁目	

徳島市末広公園は、昭和46年5月に開設された徳島市末広4丁目地先の臨海沖積地に位置する面積1500㎡の街区公園である。周辺地域の土地利用は、主に住宅地であり、徳島市営住宅・徳島県営住宅・戸建住宅等が立地している。

末広公園は、小学校区としては、沖洲小学校区と福島小学校区の校区境に位置し、沖洲小学校区に属する。公園立地状況は、一方を幅員6.0mの道路と残り三方を市営住宅に囲まれる立地となっている。また、周辺地域は公園緑地、神社・境内等の一般市民が利用できる公共の自然的屋外生活空間は少ない。現在、末広市営住宅の建替え事業が進行中であり、それにあわせて公園の再整備計画が検討されることになった。

2. 2 公園の利用状況

公園の利用状況について表－3、4、5に示す。表－3より、時間別公園利用者については、土・日よりも平日の利用者数が多くになっている。これは、平日に乳幼児をつれた保護者（主として母親）の公園利用が多いことに起因している。また、寒くなる年末に向かうにつれ、公園利用者数が減少している傾向が見られる。表－4の利用時間帯に着目すれば、利用者数が多い時間帯は、平日では12時頃の乳幼児をつれた保護者の利用と、16時頃の小学生の利用の2つの時間帯に分かれている。休日においては、10時・12時・14時頃まで連続的にまんべんなく利用されている。公園観察結果からは、これらの利用者は、単独利用でなく複数利用をしている。一方、20代以上の大人だけの利用は少なく、調査期間中で5件5名のみの、それも単独利用であった。なお、利用者の年齢は、ヒアリング及び目視での推測による。ちなみに、公園利用数からは除外したが、公園を自転車あるいは歩いて通り抜ける人が多く見られた。

表－4 末広公園 時間別利用者(人)

調査時間	平日 3日間 利用者	休日 3日間 利用者	計
06:00-06:30	0	0	0
08:00-08:30	0	0	0
10:00-10:30	6	12	18
12:00-12:30	30	9	39
14:00-14:30	5	15	20
16:00-16:30	29	5	34
18:00-18:30	10	0	10
計	80	41	121

表－2 周辺地域の都市公園整備状況

(H. 8 3月)		沖洲小学校 区域	福島小学校 区域
地域の面積	km2	3.5	1.8
地域の人口	人	4,421	4,241
都市公園数	箇所	3	1
都市公園面積	㎡/人	3.75	0.05

注：人口は平成7年度国勢調査速報による

表－3 末広公園利用調査

調査日	曜日	天気	公園利用者(人)
1995. 09/12	火	曇のち雨	41
09/24	日	曇	18
10/15	日	曇	13
10/19	木	晴	27
11/25	土	曇のち雨	10
11/29	水	曇のち雨	12

表－5 末広公園 年代別利用者(人)

利用者の 年代層	平日 3日間 利用者	休日 3日間 利用者	計
0-5	27	8	35
5-10	31	18	49
12-20	0	2	2
20代	12	4	16
30代	4	3	7
40代	1	0	1
50代	1	0	1
60代以上	4	6	10
計	80	41	121

3. 末広公園ワークショップの経緯

3. 1 背景と経過

徳島市においては、地方自治法第5条に基づく第3次徳島市総合計画が平成6年11月に策定された。この総合計画での徳島市の4つの将来像の一つに「みんなが力をあわせる市民参加都市」として住民参加ががうたわれており¹²⁾、この一貫として、徳島市都市デザイン室所管の都市デザインコード策定が、徳島県内にすむ建築・都市計画・土木・造園・美術等の専門家の参加を得て、徳島市主催の公的な都市デザイン推進会

議の場で平成5年より進められてきた。一方で、徳島市を中心とした多くの活動的なまちづくり専門グループの動きもここ数年来高揚してきた。そして、先の都市デザインコード策定の場において、行政と大学関係者を含む専門家グループの交流の中で、末広公園再整備を対象としてWS手法を用いた整備計画案作りが企画・立案され、ワークショップを自主的に研究する徳島ワークショップ研究会（以下、TWKと略記）が組織された。このように、末広WSは、行政・専門家主導型により生まれ、運営されていった。

3. 2 リアルタイム・ワークショップ

住民の参加を直接的に得るリアルタイム・ワークショップ（RWS）は、イベントによる住民PRをかねたプレRWSを含めて4回行われた。これらの概要を表-6に示す。今回のWSにおいては、木下が示したWSスコアのうち、街頭インタビュー・敷地読み取りゲーム・旗上げ方式アンケート・使い方デザインゲーム・KJ法の各プログラムを含む。「街角突撃アンケート」は、今回の地元住民組織の活動がそれほど活発でないことから、WS非参加者の意見収集、WSの広報、参加者の確保などの目的で採択した。「夢の公園づくりゲーム」「こんな公園にしたいカード選びゲーム」「公園の使い方シュミレーション」は、WS参加者が子供を比較的多く含む一般住民であることを考慮し、対象面積が狭い今回のWSで、WSの参加者の意見を今後の実際の空間整備に直接的に活用するために採択した。本研究では、このうち第1～3回のRWSを中心に分析をすすめる。

表-6 リアルタイムワークショップ（RWS）の概要

RWS	日時	場所	目的	参加者(名)	主要WSプログラム等 下線：意見抽出分を示す ●：利用に関する意見	木下によるWS スコア(注)	参加者の意見の抽出			
							自己の眼		他者の眼	
							個人の意見	グループの意見	個人の意見	グループの意見
プレ	1995 08/27 日曜 AM 晴	末広公園 末広集会所	①末広公園をつくらう会の発足 ②末広公園にみんなで集まって楽しむ	スタッフ 29 住民等 大人 51 子供 55 計 135	・WSビデオ鑑賞 ・公園で遊ぶ ・プレWSをしよう ・自由意見ボード ・参加者インタビュー		●			
第1回	1995 10/8 日曜 PM 雨	末広集会所	①参加者同士の顔あわせ ②参加者の公園づくりへの夢・期待の抽出	スタッフ 27 住民等 大人 15 子供 13 計 55	・グループ分・自己紹介 ●街角突撃アンケート ・(敷地体験ゲーム→延期) ●夢の公園づくりゲーム ●旗上げアンケート	・街頭インタビュー ・旗上げ方式アンケート	●			
第2回	1995 11/26 日曜 PM 晴	末広公園 末広集会所	①敷地の体験 ②グループに分かれての公園の起こし絵模型の製作と人気投票	スタッフ 24 住民等 大人 15 子供 13 計 52	・グループ分・自己紹介 ●敷地体験ゲーム ●こんな公園にしたいカード選びゲーム ●起こし絵模型づくり ●模型の人気投票	・敷地読み取りゲーム	●	●		
第3回	1996 02/18 日曜 PM 晴	末広集会所	①前回の復習 ②公園基本要素の最終集約案としての合意形成	スタッフ 21 住民等 大人 18 子供 16 計 55	・グループ分・自己紹介 ・前回の復習 ●公園使い方シュミレーション 「自己の眼」による 「他者の眼」による ●旗上げアンケート	・使い方デザインゲーム/KJ法 ・旗上げ方式アンケート	●		●	

注) 木下男：ワークショップによる市民まちづくりの展開、都市計画No.194 1995 p.40-41

【徳島市】		9/16	○ 徳島市都市デザイン推進会議準備会		
1994 09 月	9/16	○ 徳島市都市デザイン推進委員会設置			
12 月	12/02	○ 徳島市第3次総合計画策定			
11 月					
1995 06 月	6/02	● デザイン推進会議にて末広WSの実施提案			
【末広公園WS】		6/04	○ WS発足準備会	6/22	□ TWK発足準備会
07 月	7/28	○ 地元説明会	7/04	□ 第1回TWK	
08 月	8/27	● プレWS	8/08	□ 第2回TWK	
09 月			9/14	□ 第3回TWK	
10 月	10/8	● 第1回WS			
11 月	11/26	● 第2回WS	11/14	□ 第4回TWK	
1996 01 月			1/23	□ 第5回TWK	
02 月	2/18	● 第3回WS	2/2	□ 第6回TWK	

図-2 末広WSの経過

表-7 公園のイメージ：第1回RWS（人）

公園の好ましいイメージ	インタビュー		アンケート		計
	住民等	住民等	スタッフ		
運動ができる公園	10	14	10		34
屋敷林のような公園	7	10	12		29
噴水や池のある公園	7	9	3		19
砂場や遊具のある公園	5	8	3		16
花壇のある公園	6	6	3		15
原っぱのような公園	3	5	5		13
計	38	52	36		126

インタビュー：RWS非参加者、アンケート：RWS参加者

表-8 a. 参加者属性：第1回RWS（総数33名）

性別		区分		年代層							
男	女	スタッフ	住民	10未満	10	20	30	40	50	60以上	
17	16	8	25	11	2	2	7	3	1	7	

表-8 b. 公園利用カード選定順位：第1回RWS

子供		大人		計	
1	基地づくり	1	アスレチック	1	アスレチック
2	アスレチック	2	ブランコ	2	基地づくり
3	段ボールすべり	2	段ボールすべり	3	段ボールすべり
3	サッカー	4	基地づくり	4	ブランコ
3	ドッチボール	4	鬼ごっこ	5	ドッチボール
3	外で料理				

4. ワークショップの内容と運営状況の分析

4. 1 住民意見の分析

(1) 公園のイメージ：第1回RWS

第1回RWSにおいて、末広公園を整備していく上で望ましいイメージを、当日のRWS非参加者への街角突撃インタビュー、および参加者への旗揚げアンケートにより意見収集をした。調査結果を表-7に示す。表-7より、運動・林といった空間的広がりを求める声が比較的多く見られることがわかるが、他の項目についても要望は少なくはなく、多様な要望が見てとれる。

(2) 公園の利用：第1回RWS

第1回RWSにおいて、「夢の公園づくり」というプログラムで、あらかじめ準備した約100枚の公園利用カードから、参加者自身が公園で遊びたい遊びや行いたいことを、ひとりあたり数枚～10枚のカードを選定する作業を行った。調査結果を表-8に示す。参加者の意見の特徴として、小学生を中心とした動的・冒険的な公園利用の意見が多いこと、また、表には表れていないが、水関係の遊びは項目ごとの選択数は飛び抜けては多くはないものの、各項目ともコンスタントに選定されており水遊び全体としては参加者の要望が高いこと、数は少ないものの参加者それぞれの多様な意見があること、などがあげられる。

(3) 空間のタイプ：第2回RWS

第2回RWSにおいて、参加者が4つのグループに分かれ、末広公園の望ましい空間のタイプについて意

表-9 グループ別空間タイプの検討一覧：第2回RWS

グループ名		A	B	C	D	計
参加者	スタッフ	5	5	3	3	16
	住民等大人	2	3	4	4	13
	子供	3	3	3	3	12
	計（名）	10	11	10	10	41
使用方想像カード	①芝生と木陰とベンチがある	5	6	4	4	19
	②木の実や落ち葉、四季を感じる				5	5
	③木登りができる木の多いところ	7	9	4		20
	④遊具、冒険遊び		7	5		12
	⑤花見などのイベント	10	6	5	5	26
	⑥池やせせらぎと水遊び				11	11
空間のタイプ	⑦グラウンドでスポーツ	5				5
	得票（票）	27	28	18	25	98
	真中広場		真中広場	真中広場	真中広場	
	緑の木立					
	越こし絵模型	土と芝生の広場と緑の木立、遊具のある公園	半分が緑の木立で秘密基地の半分が広場の中に遊具のある公園	芝生広場があり広場のまわりにも木立や遊具のある公園	池とせせらぎと緑の広場のある公園	
	キャッチフレーズ	グリーンパラダイス	末広ツリーパーク	遊び公園	水と緑のふれあい公園	
人気投票	スタッフ	6	8	12	15	
	住民等 大人	2	3	8	5	
	子供	4	10	5	5	
	計	12	21	25	25	

見抽出及び集約作業を行った。具体的に“こんな公園にしたいカード選びゲーム”では、あらかじめ準備した12枚（内1枚は自由記入用の白紙）の“使い方想像カード”から、グループで4つのカードを選定したのち、グループ議論を行った。次に、各グループにおいて、公園の基本空間タイプを緑の木立型・ひょうたん島型・道ばた広場型・土俵広場型・真中広場型の5つの基本空間から選定した。そして、これらをもとに起こし絵模型を各グループごとに作成し、最後に参加者による起こし絵模型の人気投票を行った。以上の結果を表-9に示す。

公園の使い方想像カードでは、イベントの場、木の多い公園、としての利用希望が上位を占めている。キャッチフレーズから見る公園イメージは、グリーン・ツリー、遊び、緑と水、となっており都市の中の自然的要素への要望が高いことが伺われる。また、公園の基本空間タイプとしては、真中広場型の要望が高くなっている。

4. 2 ワークショップの運営組織

末広WSの運営組織図を図-4に示す。当初、末広WSは、行政・専門家グループ・住民により構成される組織「末広公園をつくろう会（以下、つくろう会と略記）」により企画・運営される方向で進められた。しかしながら、行政を通じた町内会会長などの形式的参加（受動的な参加）は若干得られたものの、今回の対象地域がこれまで目立った住民参加活動の経験を経していないことや、地域住民の中で末広WSに関するキーパーソンがWS初期段階で存在しなかったことなどより、「つくろう会」への積極的な住民の参加（主体的な参加）はWSの初期段階では得られなかった。結果的に、第1回～第3回までの末広WSの企画・運営は、「つくろう会」の中のボランティア専門家グループを中心とする徳島ワークショップ研究会（TWK）により行われた。徳島ワークショップ研究会のメンバー構成を表-10に示す。

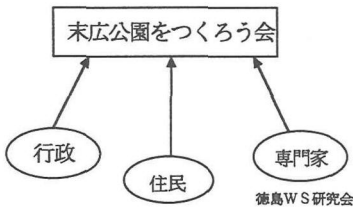


図-4 末広WS運営組織図



図-3 起こし絵模型制作状況

表-10 徳島WS研究会のメンバー構成

区分	行政	民間	大学	住民	その他	
(単位：人)	8	7	3	1	5	
専門	建築	土木	都市	造園	美術	その他
(単位：人)	10	1	3	2	1	7
年齢層	20代	30代	40代	50代	60代	
(単位：人)	2	9	12	1	0	
WSの経験	経験あり 4名		経験なし 20名		計 24名	

【注】「区分」について／行政：徳島市の都市デザイン室（今回の所管）、建築指導課、公園緑地課、開発課、住宅課、企画調整課／民間：建築、土木、都市計画の事務所／大学：学生1名含む／住民：末広公園周辺の住民／その他：主婦、学生ボランティア等

5. ワークショップにおける問題点とその考察

5. 1 ワークショップ手法について

(1) 参加者の意見の特徴と参加の限定性

「2. 2 公園の利用状況」から、現在の末広公園を最も利用しているのは小学生を中心とする子供、乳幼児をつれた母親であり、そして、就学前の子供を連れた高齢者がこれに続く。逆に、10代後半の中学・高校生や20代の独身者、30～40代の公園利用は少ない。表-5の年代別公園利用者および表-8 a. に示すRWSの参加者の構成（スタッフ含む）を比較しても片寄りが指摘できる。特に、小学生・高齢者の参加はあるものの、乳幼児を連れた母親のRWSの参加は、第1回から第3回までのRWSでは皆無であった。そし

て、参加者で10歳未満の子供の次に多いのは、公園利用者に少ない30～40代の年代層であった。このように、施設の利用者とWSの参加者の年代層は一致しておらず、RWSの参加者の年代層にも片寄りがある。また、表－6に示すようにRWSへの住民の参加数も30名前後と決して多くはない。

実際に、RWSでの”望ましい公園のイメージ(表－7)”の上位意見は「運動ができる公園」・「屋敷林のような公園」であり、”公園利用カードの選定(表－8 a. b.)”での上位意見は「アスレチック」・「基地づくり」と動的・冒険的ニーズが上位を占めて、小学生の意見は多く反映されているものの、公園利用が多い乳幼児を連れた母親や就学前の子供を連れた高齢者の意見が上位に反映されてはいない。これは、RWSにおいて運営上のプログラム制約もあるにしても、RWSの参加者は、自分自身の直接の要望や夢そして希望といった「自己の眼」による個人の意見を多く出す傾向が強いため、すなわちRWSの参加者の意見が出されたものと思われる。

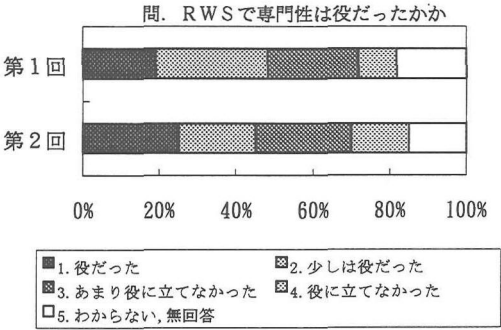
このように、RWSでは「自己の眼」による意見に片寄るという“意見の限定性”、実際の施設利用者とRWSの参加者のずれによる“参加の機会の限定性”、参加人数が比較的制限されるという“参加人数の限定性”、参加者自体の中にも年代層の片寄りという“年代層の限定性”がみられる。これら、複合的な参加の限定性が存在することにより、RWSでの参加者の意見は尊重すべきものではあるが、施設利用者の総意であるとは言い難い。したがって、RWSは参加者の構成に起因する意見の片寄りの危険性を本質的にもっており、これらの特徴をあらかじめ知った上でWSを運営していく必要があると思われる。この改善策としては、不足していると思われる年代層や利用者層の意見を、RWS参加者自らが「他者の眼」の視点で意見を抽出するロールプレイゲームや、これらWSに参加できない年代層・利用者層の個別ヒアリング等により補完しておくことなどが考えられる。現実問題として、たとえ、RWS参加者の協力が得られたとしても乳幼児連れを他のRWS参加者と同程度の時間拘束を強いることは無理があると思われる。また、第2回RWSにおける4つのグループの起こし絵模型の人気投票(表－9参照)時に観察されたことであるが、住民参加者、中でも子供の人気投票においては、計画案の善し悪しに匹敵するくらいに、プレゼンターターの善し悪しが得票を左右するため、一概に人気投票結果の大小のみをもって意見を集約することは危険と思われる。

(2) 専門家の参加

1) WS運営を専門家が兼務する場合の課題

行政・専門家主導の今回の末広WSにおいては、行政を含む専門家がWS運営者を兼務する形でWSが進行した。今回のWSを運営した専門家である徳島WS研究会(TWK)のメンバーについて実施したアンケート結果を図－5に示す。このアンケートは、第1回ないし第2回RWSの終了直後に実施したものである。図－5からTWKのメンバーの約半数は、それぞれの仕事に基づく専門知識を発揮できたとは思っていない結果となっている。また、TWKの主要メンバーのヒアリング結果からも、十分に専門性が発揮できなかったことが明らかになっている。

TWKメンバー自身の約半数が自らの専門性を発揮できなかった原因としては、RWSの場において、専門家の間に運営者としての役割と専門家としての役割の混同、いわゆる『運営と専門の混同』があったことが考えられる。この一因として、TWKの構成人数が24名と多人数であったため、RWS当日の役割分担や体制面が複雑になり、「リアルタイムの役割」における運営サイドの議論にかなりの時間を費やしてしまい、結果として、どの段階でこういった専門家として



図－5 RWSにおける専門家アンケート

の関わりができるのかといった議論や計画の時間を物理的に確保できなかったことがあげられる。WSの企画運営には、多くの地元住民の議論を促しWSの結論を導くといった「リアルタイムの役割」と、WS全体の企画や展開などを前もって議論し、また、各WSの結果を専門的に解釈し具現化の方向を探るといった「オフの役割」の2つの役割が考えられる。今回はTWKの場合「オフの役割」にあたる。今回の状況は、専門家である多くのTWKのメンバーが「リアルタイムの役割＝運営者の立場」としてRWSにのぞみ、RWSの運営者として進行などの役割は果たせたものの、結果的に、約半数のメンバーがRWSの場で十分に専門性を発揮できない状況になったものと思われる。

これらの改善策には、専門家グループがWS運営を兼務する場合、「リアルタイムの役割」の中で運営者と専門家の双方の関わり方をあらかじめ議論し、『運営と専門の混同』が生じないようにしておくこと、例えば、RWS時には一部の人間を除いてWS自体の運営に一切の責任や参加意識を持たないなどの工夫が必要と考えられる。また、既往のWSプログラムの改良やキット化などを進めて、比較的運営者や準備が少なくてすむ簡素なWS運営のあり方について研究が必要と思われる。

2) RWS時のグループリーダーとしての専門家の参加形態

第2回RWSは、参加者が4グループに分かれて公園の空間の基本タイプを選定し、その後起こし絵模型を作成した(表-9参照)。それぞれのグループ構成は10名程度であり、3～5名のTWKメンバーがスタッフとして参加した。このスタッフの構成は、1グループにつきグループ進行役1名・進行補助員1名であり、それ以外のスタッフは一般参加の形で参加した。グループ進行役には、TWKメンバーの中の専門家があたった。こうして、各グループの進行は、実質1名の専門家の判断により進められた。表-9の各グループで4枚のカード選定する”使い方想像カード”の選定結果を見るとB、Cの2グループは4枚とも選定カードが同じであり、Aはこれらのグループと3枚が同じであったのに対し、Dは2枚が異なる結果となった。そして、この使い方想像カードをもとに作成した起こし絵模型の人気投票では、スタッフの得票を最も得たのがDグループであった。

このようなグループ間での検討結果に大きな違いが見られる要因として、参加者の個人差に起因する多様性も当然考えられるが、当日の観察からは、特に参加者の意見抽出過程におけるグループ進行役としての専門家の関わり方が異なっていたことが大きく影響したものと思われる。すなわち、RWSにおいて参加者に対する専門家の関わり方は、匿名的参加・助言的参加・リーダーシップ的参加の3つが考えられ、今回の第2回RWSのDグループの進行役は、かなりリーダーシップ的参加をし、模型づくりも自らが積極的に参加し、結果的に専門的知識に富むスタッフの共感をえる案を作成した。その一方で、残りの3つのグループの進行役は、関わり方の強弱はあるものの参加者の発言を優先する助言的参加を行った。

今回の各専門家による参加形態の違いが生じた原因は、主として先に述べた『運営と専門の混同』にあり、「リアルタイムの役割」として専門家がどのレベルまで参加者意見の抽出時に関わるかという議論がないまま当日のRWSの場を迎え、参加形態の選択の判断が各専門家個人レベルで対応した状況があったものと推察される。RWSの参加者の意見抽出の場において、専門家の関わり方がグループごとに大幅に異なることは、参加者の意見の特徴を評価する上で好ましいこととはいえない。この改善のためには、あらかじめ企画段階で、専門家の参加の形態が匿名的参加・助言的参加・リーダーシップ的参加のいずれをとるかを議論して、その対応の意志統一を図っておくことが重要である。

(3) 合意形成プロセス

試行錯誤の末、進展した今回の末広WSでは、図-6に示すように、第1段階が「自己の眼」による個人意見の抽出、第2段階が「自己の眼」による4つのグループ意見の抽出、第3段階が専門家によるグループ意見の2案への絞りこみ、第4段階が「他者の眼」を用いた参加者による最終1案への絞りこみ、といったプロセスを経て合意形成に至ったと見ることができる。このように、個人(Individual)、グループ(Group)の意見収集、専門家(Professional)による集約を経て最終案の選択を行う方式をここでは便宜的に「IGP

選択方式」と呼ぶ。

I G P 選択方式の特徴は、長所の面では、①合意形成の構造およびプロセスがシンプルで分かりやすいこと、②「自己の眼」による参加者の意見の限定性を補完する意味で「他者の眼」による意見を取り入れたこと、③最終決定をRWSの場と設定したため参加者の主体性を合意形成のシステムの上で確保したこと、などが挙げられる。一方、問題点として、①RWSに連続して参加できる地元住民は決して多いとは言えず、この参加者の非連続性の点から、最終の第4段階での絞りこみが、結果的にどれだけ前回までのRWSの経過を反映しているかが明確でないこと、②「自己の眼」及び「他者の眼」を基調とした意見抽出のため、意見が対象空間に対して空間利用等の直接行動的なものとして集約され易く、対象空間の持つ文化・歴史的ポテンシャル等の意見抽出が困難と思われること、などが挙げられる。留意点としては、①4回のRWSを開催する規模のI G P 選択方式では、合意形成の範囲としては、空間基本要素というハード合意形成までが精一杯であり、細部合意形成やソフト面での合意形成までは至っていないこと、②「他者の眼」による意見抽出時には、参加者が「他者」になれるように場面設定が重要で、この場面設定も各個人ごとでなく各グループ単位で行う方が効果的と考えられること、③文化歴史的要素の抽出については、専門家の役割として、一連のWSの中に位置づけること、などが挙げられる。なお、今回は意見の数が4－2－1と集約していったが、WSの規模や形態そして参加人数の大小に応じて、6－3－2あるいは3－2－1に集約していても、もちろん差し支えない。

5. 2 空間整備システムとしてのWS手法の適用性について

(1) 行政の期待とWSを阻害する要因

ブレWSを含む4回のRWSの運営やその準備などの一連の末広WSに対して、徳島市から「平成7年度、魅力あるまちづくり推進事業／徳島市単独事業」として約100万円の予算があてられた。この金額は、今回のWSが、末広公園改修にかかる事業計画が確定していない段階でのスタートであったため、行政サイドとしてはできる限りの対応であったが、事実上、WSの材料費や講師旅費等に予算のほとんどを費やした。WS運営スタッフは、完全にボランティア参加であり、これらスタッフのヒアリング結果では、WS運営に関する今回の予算規模の少なさや、今後WS手法の予算化の必要性が指摘された。

そこで、空間整備システムとしてWSを行政が取り上げる場合の、WSに対する期待と、予算化をはじめとするWS手法の普及を阻害する要因についてのヒアリング調査を、今回の末広公園WSの行政サイドの窓口である徳島市都市デザイン室で行った。都市デザイン室は、室長・係長の2名体制となっており、ヒアリング調査は、今回の行政サイドの中心メンバーであった都市デザイン室の担当係長（40代、建築部門）に対して行った。ヒアリング結果を表-11に示す。

表-11での、「WSへの行財政上の期待」であるが、これは、従来の説明会方式や協議会方式に比べてWS方式を導入する方が、結果的に事業の地元住民への合意形成に要する費用面や時間面で効率的ではないか

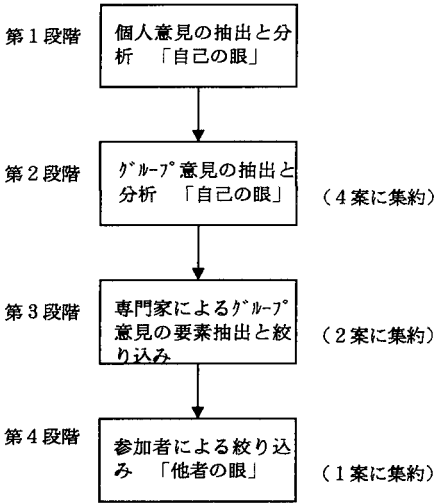


図-6 合意形成のプロセス

表-11 空間整備システムとしてのWS手法に関する行政ヒアリング

ヒアリング対象者	徳島市都市デザイン室係長／今回のWSの行政側窓口
空間整備の上で行政がWSに期待するもの	・事業の円滑な推進 ・事業計画の合意形成 ・行財政上の期待：合意形成までの費用、施設の維持管理 ・コミュニティの育成
WS手法の普及を阻害する要因	・予算計上が困難 ・WSの前例が少ない ●WSの時間がかかる ●行政の人員不足と体制 ・行政職員の理解度が低い ・WSの効果がよくわからない ●WS専門家及び支援組織の不足
凡例	●：阻害要因大 ・：阻害要因小

という認識であり、今後のWS手法の費用・時間面でのデータ蓄積が待たれる。

また、WS手法の普及を阻害する最も大きな要因としては、ヒアリング結果からは「行政の人員不足と体制」、行政以外の「WS専門家や支援組織の不足」といった、WSをとりまく人的要因が挙げられた。「WSの時間がかかる」ことは、「行政の人員不足」に関連している。これは、行政の体制やWS支援グループなどがしっかりしていないと、WSそのものが開催できないという根本的な指摘といえる。また、徳島市においては、1994年の新総合計画の中で住民参加がうたわれていることで、住民参加施策の一貫として事業計画のラインに乗る場合のWSの予算化そのものへの事務的阻害要因は少なくなっているとのことであった。

その一方で、上記の予算措置上の阻害要因が少ないというのは、WS手法の導入を前提にしたハード整備が事業化される場合に限定されることが懸念され、今回の末広公園WSの事例のような事業化が確定しない段階での空間整備初期、人材育成面でのソフト整備事業においては、やはり、実質上WS支援グループのボランティア活動に多くを期待せざるを得ない場面が想定される。WSの人的要因改善のためにも、行政におけるWS手法の予算措置化の取り組みを中心とした、予算面でのWS支援が急務と言える。

(2) 具体設計に向けてのWS情報とその伝達

WSで集約された参加者の意見や合意形成された数々のWS情報を、次のステップとして基本設計や実施設計といった具体設計段階に活用する場面を想定する。末広公園の場合、平成8年度中に公園実施設計の発注が予定されている。このように、空間整備システムとしてWS手法が導入された場合、具体設計に向けて活用が期待されるWS情報と、設計者に向けてのWS情報の伝達について考察する。

屋外生活空間を整備する場合、設計者が必要とする情報としては、主として行政などによる予算・スケジュールなどの空間整備の予条件となる「枠組みの情報」、住民などのユーザーによる計画対象空間の使い方や利用の仕方あるいは願望といった「利用の情報」、対象空間や対象地域の「空間地域の情報」の3つが挙げられる。浜口隆一が示している地域を見る視点「地の相」・「人の相」・「文の相」¹³⁾を借用すれば、この「空間地域の情報」は、更に「自然環境情報」・「人的情報」・「文化・歴史情報」の3つから構成されているものと考えられる。

末広公園WSでは、行政により「枠組みの情報」が提示され、RWSの場で表-6、7、8、9に示される「利用の情報」が大きく取り上げられ、図-6に示すプロセスを経てこの「利用の情報」はほぼ合意形成にいたったといえる。その反面、表-6から明らかなように「利用の情報」に対して「空間地域の情報」はRWSの場では、それほど焦点があてられてはいなかった。この「空間地域の情報」は、例えば“この季節にはここではこんなそよ風が吹く”などといった、生活者としての住民が日頃の長い生活体験を通して初めて得られる情報を含み、これらは、決して計画地の住民でない設計者が簡単に得られない貴重な情報である。ギブソンは、環境が動物に提供する価値のことをアフォーダンスとして、これを「動物との関係として定義される環境の性質」であるとした¹⁴⁾。先に示した「空間地域の情報」のうち「自然環境情報」は生活者にとってのアフォーダンス情報を多く含む。この「空間地域の情報」は、WSにおける行政・専門家、あるいは具体設計段階における設計者が補完できないことはないが、その判断の時間が限定されているため、判断時間を多く有する住民の持つ「空間地域の情報」には情報の質として及ばないことが容易に想像できる。アフォーダンス情報を含む「空間地域情報」はRWSにおいて是非とも焦点をあてておきたい情報といえる。

「枠組みの情報」・「利用の情報」・「空間地域の情報」の取り扱いについて、WS段階・具体設計段階の場面で考察する。

まず、WS段階においては、「枠組みの情報」は予条件としてWS参加者が共有化し、「利用の情報」はRWSの場で合意形成まで達しておき、「空間地域の情報」はできる限り抽出されておくことが望ましい。

「利用の情報」については、設計者の自由度を確保しておくことが重要で、必要以上に細部にまでWSで決定するのではなく、計画地の土地利用の大枠や主要施設の概要など、設計段階での主要設計条件レベルの決定にとどめておくことが、良質な屋外生活空間を整備するためのWSでの条件と思われる。一方、「空間利用

の情報」はまとめてしまわずに情報を一覧にしておくことが有効と考えられる。これは、「空間地域の情報」は、少数の情報であってもアフォーダンス情報などを含み、空間整備の上で重要な情報である場合が考えられるためである。

具体設計段階では、設計者は、「枠組みの情報」とWSで合意形成された「利用の情報」は設計予条件として取り扱うことが前提条件となる。空間整備の質を向上させるために、設計者は「空間地域の情報」を活用することになるが、上述したように、少数の「空間地域の情報」からも綺羅星のような情報をすくい上げ、屋外生活空間整備の質の向上につとめることが、設計者の使命といえよう。また、これらのWSの情報を円滑に具体設計者へ伝達するために、WSの初期の段階から具体設計者がWSに参画できる空間整備システムの確立が重要といえる。

6. おわりに

本研究では末広公園ワークショップを通じて、ワークショップ手法の持つ課題や改善点の一面を明かにし、また、ワークショップ手法が屋外生活空間の整備システムとして取り入れられる場合の課題等について考察した。ここで、WSはワークショップを意味し、RWSは住民等の一般参加者が参加する当日のリアルタイムでのワークショップを意味している。以下にその内容をまとめる。

(1) ワークショップ手法について

1) 参加の限定性

リアルタイム・ワークショップ(RWS)では、①RWS参加者が自分自身の要望や希望といった「自己の眼」による意見を多く出す傾向が強いことによる“意見の限定性”、②実際の施設利用者とRWS参加者のずれによる“参加の機会の限定性”、③参加人数が比較的少ないことによる“参加人数の限定性”、④参加者の年代層の片寄りによる“年代層の限定性”といった、複合的な参加の限定性が存在する。したがって、RWSでの参加者の意見は尊重すべきものではあるが、施設利用者の総意ではないものと考えられる。この改善策として、ロールプレイなどの手法によるRWS参加者による「他者の眼」による意見抽出や、WS非参加者へのヒアリングにより補完することが望まれる。

2) 専門家の参加

a. WS運営を専門家が兼務する場合の課題

WSの企画・運営者としての専門家は、RWSの場における「リアルタイムの役割」とそれ以外の「オフの役割」の2つの役割を持つ。「リアルタイムの役割」では運営者としての役割と専門家としての役割があり、これらの混同、すなわち『専門と運営の混同』があった場合、RWSにおいて効果的な専門性の発揮が弱まる。この改善策として、専門家の役割として、「リアルタイムの役割」としての運営の役割と専門家の役割をあらかじめ議論し明確にしておくこと、また、比較的運営労力や準備の少なくすむ、簡素なWSのあり方の研究が必要と考えられる。

b. RWS時のグループリーダーとしての専門家の参加形態

RWSでの参加者の意見抽出過程における参加者に対する専門家の参加形態には、匿名的参加・助言的参加・リーダーシップ的参加の形態が考えられる。RWSのグループ意見集約時に、グループ進行役としての専門家の参加形態がそれぞれ異なる場合、集約されたグループ意見はグループ間で大きく異なる可能性が高く、好ましいことではない。各専門家における参加形態の相違の原因は『運営と専門の混同』にあるものと思われ、この改善策としては、あらかじめRWS企画段階で、専門家の参加形態を議論し各グループ間で意志統一を図っておくことが重要である。

3) 合意形成プロセス

WSの一つの合意形成の手法として、第1段階が「自己の眼」による個人意見の抽出、第2段階が「自己の眼」によるグループ意見の抽出、第3段階が専門家によるグループ意見の絞りこみ、第4段階が「他者の眼」を用いた参加者による最終1案への絞りこみ、という4段階のプロセスからなる「I-G-P選択方式」が

有効な手法として考えられる。

(2) 空間整備システムとしてのWS手法の適用性について

1) 行政の期待とWSを阻害する要因

ヒアリング結果から、行政がWSに期待するものは、事業の円滑な推進、事業計画の合意形成、行財政上の経済効果、コミュニティ育成であった。WSを阻害する要因としては、WSをとりまく行政内外の人材・人員・組織といった人的要因が大きいと意識されている。今後、WSの人的要因改善のためにも、WS手法の予算措置化を中心とした、予算面でのWS支援が急務といえる。

2) 具体設計に向けてのWS情報とその伝達

WS情報を具体設計に活用する場合、「枠組みの情報」・「利用の情報」・「空間地域の情報」が必要となる。これまでの末広WSでは「枠組みの情報」・「利用の情報」は抽出されているが、「空間地域の情報」はあまり抽出されていない。「空間地域の情報」は、生活者としての時間をかけた住民のアフォーダンス情報を含んでおり、今後WSで重視する必要がある。具体設計にあたって設計者は「枠組みの情報」・「利用の情報」については設計と条件として取り扱うことが前提となり、「空間地域の情報」は少数の情報であっても十分に注意を払っておく必要がある。

末広WSは現在、途中段階であり、行政においても、WS成果を現実の公園整備に反映できることを前提として、平成8年度のWS予算および公園詳細設計の予算が行政において計上された。今後、末広WSの場から、今回の研究を継続していきたいと考えている。

謝辞：本研究を遂行するにあたり、徳島市・徳島WS研究会・末広公園WS参加者の方々からは種々のご協力やご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 浅海義治：ワークショップその手法とまちづくりへの活用、建築ジャーナル1991. 6
- 2) 1)に同じ
- 3) 木下勇：住民参加形まちづくりー世田谷太子堂から、緑の読本Vol. 28、1992年、p. p. 66-71
- 4) 浅海義治、伊藤雅春他：参加のデザイン道具箱、世田谷まちづくりセンター、平成5年8月、p. p. 88-89
- 5) 林泰義：ワークショップの効果と意味、建築とまちづくりNo198、1993. 9、p. p. 2-3
- 6) 浅海義治、伊藤雅春他：参加のデザイン道具箱、世田谷まちづくりセンター、平成5年8月
- 7) 木下勇：ワークショップによる市民まちづくりの展開、都市計画No. 194 1995 p. p. 39-42
- 8) 藤本信義・三橋伸夫ほか：ワークショップ方式によるコミュニティ公園計画、日本建築学会地域施設計画研究Vol. 10、p. p. 183-190
- 9) 葉袋奈美子・高見沢邦朗ほか：住民主体のまちづくりへの自治体および外郭団体による支援の現状と課題、1995年度第30回日本都市計画学会学術研究論文集、P331-336
- 10) 6)に同じ、p. p. 10-11
- 11) 6)に同じ、p. p. 12-17
- 12) 徳島市：第3次徳島市総合計画、平成6年11月
- 13) 中嶋健司：浜口隆一最後の問題提起、新地域主義の時代、シリーズ13、近代建築Vol. 50、1996. 2、p. 17
- 14) 佐々木正人：アフォーダンスー新しい認知の理論、岩波科学ライブラリー12、岩波書店、1995年1月第4刷、p. p. 60-66